

## 【研究論文】

# 岐阜大学愛唱歌「我ら多望の春にして」 の源流を訪ねて(下編)

## 時代背景と「凜真寮歌」との二重構造

荒幡 克己<sup>1</sup>，下道 郁子<sup>2</sup>，廣内 大輔<sup>3</sup>，西尾 洋<sup>4</sup>，杉山 道雄<sup>5</sup>

<sup>1)</sup> 岐阜大学応用生物科学部，<sup>2)</sup> 東京音楽大学音楽学部

<sup>3)</sup> 岐阜大学教育推進・学生支援機構，<sup>4)</sup> 岐阜大学教育学部

<sup>5)</sup> 岐阜大学名誉教授

### 要旨

岐阜高等農林学(以下、「岐阜高農」という。)校歌「我ら多望の春にして」ができた大正 15 年当時，岐阜高農の寮生は，この校歌を歌った後に，セットとして，「凜真寮歌」を歌っていた。その理由は，「我ら多望の春にして」は西洋音楽の系譜の長調で歌い難く，その代償として，曲は短調で，詩も庶民的で歌い易い「凜真寮歌」を歌っていたものと考えられる。

今日，振り返ると，「我ら多望の春にして」は，当時としての歌い難さ故に，長調が好まれる現代では逆に歌い易いこととなり，愛唱歌として残ることになったものと言える。類似の例として，札幌農学校の「都ぞ弥生」が挙げられる。これも，作成当時，「歌い難い」と評判が悪かったが，そのことが逆に，時代を経ると，短調ではないが故に，今なお愛唱されていることにつながっている。「我ら多望の春にして」の位置づけも，類似している。

キーワード：凜真寮歌，都ぞ弥生，校歌・寮歌の二重構造

### 1. はじめに

岐阜大学の愛唱歌，「我ら多望の春にして」が，岐阜高等農林学校(以下，「岐阜高農」という。)校歌として生まれた大正 15 年当時，歌い易い曲調は，テンポのゆっくりした短調であった。当時の旧制高校寮歌は，こうした歌い易い曲調で，一方その歌詞は，庶民から見れば高尚な内容で，高らかに理想を歌い上げた。しかし，岐阜高農校歌は，生徒の作曲ではなく，西洋音楽の系譜として，作曲家，岡野貞一が手掛けた。それは，長調であり，歌い難い系譜のものであった。歌詞も，一番は旧制高校寮歌らしさがあるが，次第にそうではなく，

三番はプロテスタントの勤勉思想も入り、馴染みにくいものだった。

他の旧制高校であれば、ゆっくりとしたテンポの短調の曲に乗せて、理想を高らかに歌い上げ、掛け声とともに、若い元気を発散させていたが、西洋音楽のトーンが強い長調の曲では、こういうことはできない。それでは、この歌い難い岐阜高農校歌がある中で、学生は、どのような対応をしたのであろうか。

## 2. 分析の視点と分析方法

本稿の分析課題は、前稿(上編)と同様に「我ら多望の春にして」の作成当時の生徒の受容性を解明することにあるが、その接近方法として、本稿では、直接的にではなく、間接的かつ広範な領域の史料を渉猟して、実態解明を進める。その間接的な接近方法として、第一に、社会経済、教育制度、西洋音楽の受容性等について、当時の時代背景を詳細に分析する。第二に、当時の岐阜高農で歌われていた「凜真寮歌」を比較分析の対象として取り上げる。その理由として、当時の岐阜高農の生徒は、「我ら多望の春にして」を歌った後に、セットとして、「凜真寮歌」を歌っていた事実を指摘しておく。この「凜真寮歌」との比較を通して、「我ら多望の春にして」の性格をより明確にする。

## 3. 分析課題 1：時代背景等の広範囲の分析

### (1) 大正 12～15 年という時代

戦前の時代については、その大筋の流れとして、明治維新以来、富国強兵で、第二次大戦まで一直線、というのが如き印象を持っている者も多い。しかし、社会経済史の視点からその流れを正確に辿ると、この理解は正しくない。そこには、実に多くの紆余曲折があり、明治の建国と第二次大戦への破滅的突入が必然的、という訳ではない。以下では、これを辿る。

#### A. 大正 12 年まで

明治維新以降の社会経済の風潮を振り返ると、攘夷から一転して、西洋文物の模倣へと転じた明治政府の方針は、人々の生活意識にも伝わり、「西洋から学ぶ」という素直な姿勢が、明治 20 年頃までは基調となった。井上馨が主導した「鹿鳴館時代」は、政治経済のみならず、文化の面でもこれを推進しようとした時代であり、その典型であった。

これに対して、明治 28 年の日清戦争勝利は、国民の意識に大きな変化をもたらした。ナショナリズムは高揚した。ナショナリズム高揚期には、西洋文化のそのままの模倣に対する反発が見られた。明治 38 年の日露戦争勝利は、このナショナリズムをさらに高めた。

しかし、それも次第に治まると、世論は次第に、藩閥政治打破、自由、民意という方向へ進み出した。この動きが、いわゆる大正デモクラシーである。大正 2 年、桂内閣を倒す第一次護憲運動がおこった。加えて、大正 3～6 年の第一次世界大戦では、日本は戦勝国となり、輸出での軍事特需では景気は活況を呈した。

ところがこの風潮は、三つの事象によって、後退を余儀なくされた。それは、第一に大戦後の不景気である。第二に、大正 7 年、米騒動である。これにより、寺内内閣は倒れ、原内閣が成立した。第三に、大正 12 年の関東大震災である。これは、首都を襲ったということもあり、実に国民総生産 GDP の 3 分の 1 が失われた。

こうした中で、大正 12 年、「岐阜高等農林学校」が設立された。

#### B. 大正 12~15 年

大正 13 年から、日本経済は、関東大震災の打撃からたくましく回復していった。そして、大正 13 年、第二次護憲運動が高揚する中で、加藤高明内閣が成立した。時代は、再び、大正デモクラシーの時代へと入っていった。

第一次護憲運動の時の大正デモクラシーと比較すると、この時代の方が、政治だけではなく、社会経済的に、更には文化的に自由を謳歌する時代へと進んだことが指摘できよう。即ち、この年、大正 14 年、ラジオ放送が開始された。東京浅草では、喜劇が流行した。「モボ、モガ」の時代は、典型的にはこの時期である。

この時期を語る上で、最も重要な領域は、外交と軍国主義の動向である。加藤高明内閣では、幣原喜重郎が外相に就任した。それ以前からも外交に関わってきた幣原は、この時期如何なくその持ち味を発揮し、世に「幣原外交」と言われた。それは、基本的に、欧米との「協調外交」である。第一次大戦後の国際的な軍縮路線の一環として、欧米との協調外交に則り日本の軍縮も進んだ。この時代背景について、松元(2009)は、次のように述べている。

「軍服で街中を歩くのがはばかれるようになった」

「婚約が決まっていた若い将校は、軍縮が決まり、相手から破談を申し渡される」

このように、大正 15 年は、政治(デモクラシー)、経済(好景気)、外交(軍縮、欧米協調)、文化(モボ・モガの時代)のいずれの面でも、自由を謳歌した時代であった。

#### C. 昭和元年以降

わずか数日の昭和元年を経て、昭和 2 年に入ると、その秋、金融恐慌が起こった。町には失業者が増した。そして、これに追い打ちをかけるように、昭和 4 年、世界恐慌が起こった。当時の日本経済のリーディングインダストリーで、輸出外貨の稼ぎ頭だったのは、生糸であった。これを世界恐慌が直撃した。こうした経済的苦境は、元々あった日本の所得格差をさらに拡大し、社会的不満は高まった。世論は、この不満のはけ口を海外に向けるようになり、国際協調から一転して、外国排斥的な論調が拍手喝采を浴びる傾向に変わっていった。

昭和 6 年には、満州事変が勃発し、昭和 7 年、五一五事件が起こった。昭和 8 年、日本は、国際連盟を脱退した。明治維新以来、基本的には底流として流れていた欧米協調路線は、幣原外交からわずか数年で、その正反対の方向に歩み出した。昭和 11 年には、二二六事件が起き、翌年から日中戦争に突入した。庶民的には、この年から、戦争モードとなった。

#### D. 総括

以上のように、「我ら多望の春にして」が作詞作曲され、公表された大正 15 年という時代は、一言で言うならば、「束の間の自由」を謳歌した、実に良き時代だったのである。

## (2) 旧制高校、旧制大学の対極構造と岐阜高等農林学校の位置づけ

次に、本稿の分析課題に即して、確認しておくべき時代背景として、寮歌や農学教育に係るものを三つ指摘する。

第一に、旧制高校では、第一高等学校（一高）と第三高等学校（三高）は、良い意味でのライバル関係にあったことである。対校戦等でもライバル意識を燃やしていたが、加えて校風、気風でも違いがあった。それが、寮歌にも端的に表れていた。その象徴的なものとしてよく知られているものは、一高が「自治」（自治共同と籠城主義）を重んじ、寮歌にも、これに関連した語句が頻出するのに対して、三高は、こうしたフレーズとして「自由」を標榜していたことである。当時は、下道(2009)が指摘しているように、校風と寮歌は、結び付けて考えられていた。こうした中で、地理的には中間に位置する岐阜であった。

第二に、農学教育での対極構造である。明治 9 年、わが国初の農学校は、札幌に作られた。これに遅れて、明治 11 年、駒場農学校が設立された。駒場農学校よりも札幌農学校開校が早いことに注意する必要がある。かくして、農学教育では、二大対極構造として、札幌農学校と駒場農学校が形成された。

教育方針の背景にある日本農業の将来ビジョンにおいて、二校の相違は明白である。札幌農学校は、アメリカ農業に範を取り、「大農」主義を採用し、アメリカ型の大規模農業を目指した。それは、夢のあるビジョンであった。これに対して、駒場農学校は、当初はイギリス、次いでドイツ農学に範を取り、「小農」主義を採用し、日本の小農の実態に合わせた現実路線を採用した。これら二校に遅れて、後に京都帝国大学にも、農学分野が開設された。そのビジョンは、駒場農学校が目指した「小農と言っても比較的中程度の規模がある農家」に対して、一層小さい「零細農」に焦点を当て、社会的弱者たる下層農の農業を改善することを一義とする農業ビジョンであった。かくして、この京都帝国大学の系譜を含めると、日本の農学の帝国大学における教育研究の系譜は、三極構造でリードされるものとなった。

第三に、高等農林系の学校の系列的性格である。明治後期になると、農学では、明治 35 年には、盛岡に高等農林学校が設置された。高等農林系の学校は、その後も各地に次々と設立された。盛岡の後に、二番目に鹿児島に設置され、しばらくのブランクを経た後に、大正 9 年から 13 年にかけて 5 校の地方高等農林学校が増加設置された。岐阜高農は、その 5 校の中の一つであった。ただし、これらの高等農林系の学校は、前述の農学教育の対極構造の中で、いずれかの大学が、いわば親元となって、系列の地方高等農林学校の設立から初期の運営に至るまで人材派遣等を通して面倒を見る、という形で形成されていった。例えば宇都宮高等農林学校は駒場農学校系列であったのに対して、岐阜高農は、周知のように、札幌農学校系列として開校された。

今日なお残る、応用生物科学部第一会議室、学部長室に掲げられた新渡戸稲造の 2 つの

扁額、第二会議室の佐藤昌介の扁額は、このことを物語っている。ただし、新渡戸は、大正9年から15年まで、国際連盟事務次長の要職にあった。確かに、新渡戸は後述するように一高校長等も務め、著名人であったが、中村(2008)が指摘するように、岐阜高農設立及びその揺籃期の指導は、むしろ親元とも言うべき札幌農学校の後身、東北帝国大学農科大学(後の北海道大学農学部)で後の初代北大総長を務めた佐藤昌介が務めていた、と見るべきであろう<sup>1</sup>。因みに、佐藤は、札幌農学校の一期生で、直接クラーク博士の指導を受けた。新渡戸は二期生である。

とはいえ、佐藤と新渡戸は、無二の親友であり、ともにクラーク博士の教育方針、即ちプロテスタントの教えを基礎として、勤勉と自主独立の精神を貴び、人格の陶冶を目指す教育に薰陶を受けた仲間であった。有島武郎等も含む、彼ら初期の札幌農学校生は、共通の思想基盤と友情の固さを特徴として、よく知られていた。後述するように、こうした札幌農学校の教育精神が、岐阜高農の初期の教育に強く影響した。

このように、岐阜高農は、その旧制高校、帝国大学やその農学教育の系譜の中で位置付けると、次の二点を重視する必要がある。

- ① ライバル意識が旺盛な一高と三高の地理的に中間に位置していた。
- ② 札幌農学校系列の高等農林学校として設立された。

### (3) 集まった若人の階層性

当時の帝国大学への進学率は、2%にも満たなかったとされる。旧制高校も同様であった。高等農林学校や高等工業学校は、これに次ぐ高学歴のエリート層であった。事実、後述する「凜真寮歌」を作成した7人の生徒のほとんどは、例えば、海津村の大地主の息子、というような地方の富裕階層の子弟であった。戦前の日本は、現在よりも社会的経済的に格差のある社会であり、農村社会でその頂点に立つのが地主であった。ただ、当時の大地主層は、近世の豪農の系譜を受け継ぎ、社会的指導層としての責務も強く意識し、農業技術の指導はもちろんのこと、河川改修に私財を投げ打つ、というようなパブリック精神の持ち主であった。高等農林系の学校の生徒は、こうした地主階層からの出身者が大半であった。事実、現在の偏差値的に見れば、今日、地方国立大学の農学部に入るよりも、はるかに狭き門であった。

確認しておくべきことは、高等農林学校や高等工業学校は、「高校」ではなく「大学」という意識でとらえるべき、ということである。例えば、昭和3年、岐阜高農が初めて卒業生を送り出す際、同窓会誌である「各務時報」(1928)には、「3年間のカレッジ・ライフを無事に終え、華々しく新生のスタートを切る諸氏の姿」と描写されている。

生徒の意識は、今日想像する以上に、良い意味でエリート的であり、旧制高校から帝国大学に進んだエリート層に準ずる形で、社会的指導層になることを意識していた。事実、初期の岐阜高等農林の卒業生は、例えば林学では営林署長、農学では県立農事試験場主任研究員、更には県庁の普及指導担当や出先普及所の所長等の要職に就き、日本の農林業を公務として指導した。そして、その行動様式は、当時の旧制高校生徒とほぼ同様に、寮生活を基本と

し、高き理想を夜を徹して語り明かし、友情を育んだのであった。

#### (4) 音楽を巡る明治・大正期の時代背景、特に西洋音楽の受容性

当時の音楽的な時代背景として指摘しておくべきことは、西洋音楽の受容性が、今日からすれば想像し難いほど、現代とは異なっていたことである。

大正 15 年当時、ラジオ放送開始からわずか一年程度であるから、いわゆる流行歌の類はほとんどないに等しい。庶民の歌といえば、例えば「書生節」等であった。口伝で広まっていた歌のみである。こうした背景もあって、歌の流行り廃りは、かなりゆっくりであった。例えば明治中期に生まれた「オッペケペ節」は、この時期でも、まだ盛んに歌われていた。富裕層は蓄音機を購入して音楽を聴くこともなかったわけではないが、村に一台あるかないか、という程度で、大衆がこれにより音楽鑑賞をすることはほとんどなかった。富裕層よりももう少し下の、いわゆる中流階層まで親しまれたのは映画であり、映画の音楽は、多少は一般性があった。例えば、大正 7 年に主題歌ができた「金色夜叉」は、盛んに上映されていたので、この歌も、中流以上の階層に限れば、比較的良好に知られた歌の一つであった。

とはいえ、今日戦前の懐メロとして耳にするほとんどの歌謡曲は、昭和 5 年以降、ラジオの普及後に急速に流行ったものである。大正 15 年というのは、その前の時代であった。当時の庶民が親しんでいた曲は、端的に言えば「短調でゆったりとしたもの」であった。それは、いわば三味線の伴奏の御座敷歌や労働歌としての民謡(田植え唄、馬子唄、木挽き唄等)の延長であった。

こうした中で、旧制高校寮歌は、そのリズムの類似性から、いわゆる軍歌を連想する者も少なくない。しかし、その歌詞は、自由、自治を強調し、権力に対して、決して同調的ではない。エリート意識の強さ故に、社会的責務を強く任じ、弱者救済の社会思想も盛り込まれる、というような内容であった。確かに、旧制高校寮歌と軍歌は、リズムの類似性はあるが、歌詞の思想的背景は全く異なっていた。

なお、ラジオ放送もほとんど普及していない時代であったので、旧制高校寮歌は、高等女学校の生徒が、憧れの気持ちも込めてよく歌っていたことも指摘しておく必要があろう。高橋(1978, pp.33-34.)によれば、「一高の寮歌が最初に愛唱されるのは、お茶の水の女生徒……日本中の女学生が一高の寮歌を歌った」とされる。また、その伝播も早く、明治 34 年 4 月の墨田川ボート競技で初めて披露された一高寮歌「春爛漫」は、作詞者の矢野が、7 月に京都府立高等女学校を訪れたところ、寄宿舎から、この歌が洩れてくるのを聞いたという。

ただし、寮歌に関しては、明治期と比較して大正期には、かなり進歩が見られたことも指摘しておく必要がある。下道(2009)は、明治期の寮歌と比較して大正期には、三拍子の割合が高まってきたこと、アウフタクトが多くなったこと等を指摘している。しかし、その一方で、リズムは、軍歌調の単純な付点音符のリズムが圧倒的に多いという。

#### 4. 分析課題 2: 比較対象としての「凜真寮歌」

前述のように、岐阜高農では、校歌「我ら多望の春にして」とともに、「凜真寮歌」がセットで歌われていた。校歌を理解する上でも、対となっていた凜真寮歌について、分析しておく必要がある。

### (1) 作成過程

この寮歌は、生徒による作詞・作曲であり、いわば純粋な寮歌である。現在残されている各種の記念誌等では、宮崎良一と安田享一による作成となっている。しかし、この記録は、明らかな誤りである。まず、宮崎の名前は、宮崎良夫の誤記である。

次に、寮歌の作成には、上記の二人だけではなく、計7人が関わっている。二名が記されているのは、あくまでその代表としてである。関わった他の5人は、竹市鼎、荻谷正次郎、水野耕一、平吉功、野村陽一郎である。宮崎、安田、竹市、荻谷が第二期生、平吉、水野、野村の三人が第三期生である。このうち、作曲に関しては、特に安田が中心となり、木曾川河畔で、マンドリンを弾きながら曲を練り上げた、と伝えられている。

7人の中には、学究の道に進んだ者も多い。竹市は、農村社会学専攻で、学部長を務めた奥田彥に師事し、台北帝国教授を務めた後に、名古屋大学に転じた。水野耕一は、生態学を専攻し、京都帝国大学に進み、後に東山動物園の園長を務めた。平吉は、小麦の遺伝子解析で世界的に著名な京都帝国大学の木原均に師事し、自らはススキの遺伝的解析で業績を上げ、後に戻って岐阜大学農学部の学部長を務めた。なお、この水野や平吉のように、学究の道に進む者は、当時、地理的な近さもあって、京都帝国大学に進学する者が多かった。このことが後述するように、凜真寮歌の性格に影響する。

### (2) 曲としての特徴

凜真寮歌の曲としての特徴を見ると、全体として平易で親しみ易く、歌い易い曲調である。音楽的にはヨナ抜き音階で、伝統的な日本の音楽の系譜である。音程が跳躍するところが多いことも、もう一つの特徴である。なお、第三行の「春を讃うる若人が」のところは、楽譜上は、*ha·ru·o·u·ta·ta·u·ru* と少しずつ音程が上がることとなっているが、実際には一気に上がり、*ha·ru·oh·ta·ta·u·ru* と歌うのが通例であり、音程の跳躍は、楽譜以上に激しい。

音程が跳躍することにより滑らかさが減ずるが、その反面、力強さが出てくる。なお、現在録音されている凜真寮歌は、男女のコーラスにより穏やかなものとなっている。これは、おそらく現代の音楽受容性にはある程度合わせたものであり、その良さもある。とはいえ、元々の歌い方は、他の旧制高校寮歌と同様に、勇壮に歌われたものであった。

### (3) 歌詞の特徴

凜真寮歌の歌詞としての特徴は、自然の描写が中心となっていることである。また、寮歌の一要素である「雄健」を感じさせるような「男子」、「剛健」、「丈夫」等の語句がないこと

も特徴である。歌詞の面でも、平易で取りつきやすい内容である<sup>2</sup>。宇都宮(1996)によれば、寮歌は、「土井晩翠」の詩を範とする、漢語を多く取り入れた「晩翠調」と、「島崎藤村」の詩を範とする、和語を取り入れた「藤村調」とに大別される、という。凜真寮歌は、曲においては、伝統的な寮歌の形式に則った構成であるが、歌詞については、難解な漢語はなく、藤村調である。以下では、細かくその特徴を見ていこう。

①春夏秋冬が順番に出てくる

歌詞を見ると、四番まで、それぞれ春夏秋冬が割り当てられている。この構成は、今日の常識に照らして見れば、極めてオーソドックスな構成のように見える。ところが、旧制高校寮歌の世界では、必ずしも自明な順序ではない。それどころか、むしろそうではないものが多数派である。作成年次が凜真寮歌よりも古いものを中心に、寮歌の季節性により類型化するとつぎのようになる。

A タイプ 春の次に秋が来るもの

一高 春爛漫の花の色，札幌農学校 都ぞ弥生

A タイプの変則

五高 武夫源頭に草萌えて（一番の中に春と秋が入っている）

六高 新潮走る紅の(一番の春だけで，他の季節は出てこない)

七高 北辰斜に(同上)，一高 のどかに春訪れて(同上)

B タイプ 秋が一番に来るもの

四高 北の都に秋長けて，一高 芸文の花

C タイプ 春の次に明示的に夏が来て，秋，冬と続くもの

三高 紅萌ゆる，八高 光のどけき，(岐阜高等農林学校 凜真寮歌)

寮歌集(1996)に掲載されている旧制高校寮歌のうち、いわゆるナンバーズクールのもの、101 曲で、四季が春から順番に出てくる C タイプは 4 曲のみ、このうち、凜真寮歌以前に作成されたものは、上記の三高の「紅萌ゆる」と八高の「光のどけき」の 2 曲のみである。

凜真寮歌を作った 7 人のうち、少なくとも 2 人は京都帝国大学に進学した。また、その他にも、成績上位の者は、当時京都帝国大学に多数進んでいた。三高の校風への憧れが、凜真寮歌作成者全体の雰囲気として相当あったとすれば、三高精神の象徴とも言える「紅萌ゆる」を模倣して、春夏秋冬を順番に歌いこんで寮歌を作成したとしても、不思議はない。

②エリートの社会的責務や目標，理想を提示するフレーズはわずかしかない

この種のフレーズとしては、唯一、一番の最後に「久遠の理想，誰か知る」がある。しかし、ここだけである。他の寮歌では、こうした内容のフレーズが、至るところに横溢し、いささか辟易するほどであることが多い。

例えば、六高の「新潮走る紅の」では、「混濁よそれ人の世か、-----されと悲歌せじ徒に、我らが使命重ければ---」，五高の「武夫源頭に草萌えて」では、「時難にして義を思い、-----



ああ新興の気を負いて、浮華の巷にわれ立てば」とある。

これに対して、凜真寮歌は、坦々と、気負いなく四季を歌い込んでいる。「我ら多望の春にして」が、一般の寮歌と同様に理想を高らかに歌いこんでいるのに対して、凜真寮歌では、それがほとんどない。曲自体が当時の大衆の曲調の嗜好にマッチしていることも相まって、凜真寮歌を歌う時には、一種の「息抜き」感をもたらしたものと考えられる。

## 5. 考察

### (1) 岐阜高等農林学校の生徒が歌う歌の二重構造

以上のことを考え合わせると、他の旧制高校の寮歌等と比較して、岐阜高等農林学校の学生が歌う校歌、寮歌は、次のような二重構造になっていたものと位置づけられる。

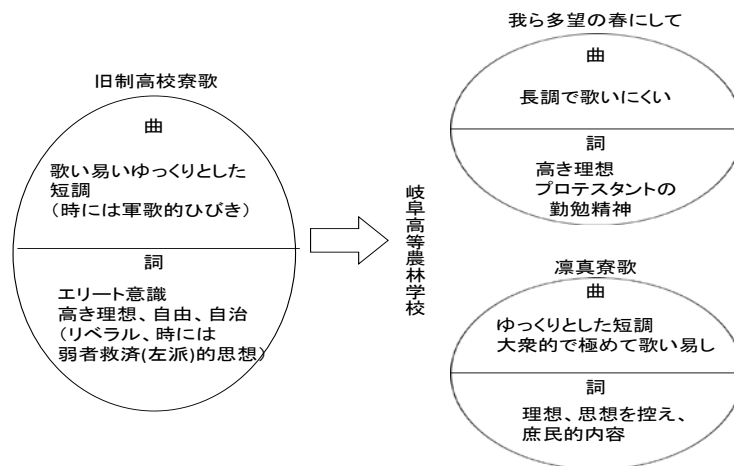


図1 岐阜高等農林学校の校歌・寮歌の二重構造

図1に示したように、旧制高校の寮歌では、歌い易い短調に乗せて、時には軍歌的な響きを持たせながら、歌詞としては、社会階層的にはエリート層としての自負から、庶民から見れば、やや高尚な内容で、高らかに理想を歌い上げたものだった。

これに対して、「我ら多望の春にして」は、当時としては歌い難い長調であった。また、歌詞は、理想を高らかに掲げつつ、さらにそこには、札幌農学校のプロテスタント思想にも影響された部分もあり、馴染みにくい内容であった。

しかし、同時期に作成された「凜真寮歌」は、その曲調は、ゆっくりとした短調で、響きも大衆的であり、また、歌詞も、他の旧制高校寮歌のように、高邁な理想は前面には出さず、簡素で淡々と四季を歌いこんだもので、思想性はほとんどなく、馴染みやすいものであった。

旧制高校の寮歌等で、明治・大正期に、西洋音楽をベースとする長調であるから故に、歌い難いと不評であった歌の例として、ここでは、北海道大学の恵迪寮歌、「都ぞ弥生」を挙げる。この歌は、その後、現代となって、当時の日本人に馴染みのあった、日本の伝統的な

音楽構造による曲調ではなく、西洋音楽の曲調だったが故に、今の学生にも受け入れられている。編曲されたものがオーケストラにより演奏され、今なお、愛唱されている。下道(2012b)は、このことを「幸運な寮歌」と形容している。「我ら多望の春にして」の位置づけも、類似している。

確かに、「我ら多望の春にして」は、西洋音楽の作曲の訓練を受けた、プロの作曲家、岡野貞一によるものであり、当時好まれていた、和風の大衆歌謡と異なるのは当然である。この意味で、生徒の作曲にもかかわらず西洋音楽的な曲調を実現した「都ぞ弥生」の作曲の卓越性は、同じ土俵で比較すべきものではない。

とはいえ、現代の学生の受容性という側面に関しては、その歌の来歴はどうあれ、類似の反応であることは変わらない。そして、このことを深く理解する意味で、岐阜高農の歌った二つの歌の二重構造を知ることは重要である。

## (2) 「雄健」を感じさせる語句が、「都ぞ弥生」、「我ら多望の春にして」ともにないこと

「都ぞ弥生」と「我ら多望の春にして」の類似性、「曲として、長調であるため、作成当初歌い難いと不評、逆に現代の学生にとって受容性は低くはない」、に関しては、もう一つ、歌詞として、「雄健」を感じさせる語句がないことも重要である。高橋(1978)は、寮歌の歌詞が具備すべき要件として、「格調の高さ」と、「雄健」を挙げている。このうち、上記の二つの歌は、共に「雄健」を感じさせる語句がない。現代の大学の多くが男女共学であることを考えれば、上記の二つの歌が現代の学生にも受け入れられている要因として、「雄健」なる語句がないことがかなり影響としてしていると見てよい。以下では、これを少し掘り下げよう。

宇都宮(1996)によれば、旧制高校寮歌は、次の三つに類型化される、という。

- ① 理想主義(アイデアリズム)の寮歌
- ② 浪漫主義(ロマンチズム)の寮歌
- ③ 叙情主義(リリシズム)の寮歌

ただし、截然と区別されるものではなく、時として、同じ寮歌の中で、例えば、一番は多分に浪漫主義的、二番前半では理想主義を前面に出し、その後叙情主義に移っていく、というようなことも少なくないという。その具体例として、一高寮歌「春爛漫」は、一番、二番はそれぞれ春の景色と秋の景色の描写だけであり、極めて叙情的である。しかし、三番で「勤儉尚武の旗の色 自治共同の笛の声」と高らかに理想主義を掲げる。

「我ら多望の春にして」は、二番以外はほとんど理想主義である。ところが、それにもかかわらず、「雄健」なる語句はない。

北海道大学、「都ぞ弥生」に、寮歌の二大特徴である「雄健」を感じさせる語句がないことについて、補足説明しておく。一番の最後に、わずかに「人の世の清き国ぞと憧れん」と浪漫主義を感じさせる一句があるが、それ以外は、一番の春、二番の秋、三番の冬、四番の夏、ほとんどすべて叙情主義に基づく自然描写が続く。そして、理想主義は、五番にのみ表出する。ただし、それは、雄健なる語句はない。五番は、前半で日の出を自然描写した後に、

後半で、次のように理想主義を述べている。「自然の巧みを懐かしみつつ 高鳴る血潮の逆り以て 貴き野心の訓え(おしえ)培い 栄ゆく 我らが寮を誇らずや」。

一番から続く全体のテーマである「自然」を継続しつつ、建学の精神ともいえるクラーク博士の *ambitious* を、青春の情熱と絡めてスマートにまとめている。

「都ぞ弥生」,「我ら多望の春にして」,共になぜ「雄健」なる語句を避けたのか,それは,札幌農学校以来の伝統的な教育精神が育んだ帰結と言える。明治 9 年開学時から,授業は全て英語で行い,キリスト教精神に基づく教育を行っていた札幌農学校,その国際性重視の伝統からすれば,「男子」というような語句が入らないのは,極めて自然なことであった。

これをよく理解するため,ここでは,新渡戸稲造の逸話を紹介する。実際に,これらの寮歌や校歌の作成深くかかわったのは,新渡戸というよりも,佐藤昌介であるが,二人は無二の親友で,思想信条もほぼ同一と見てよい。逸話が豊富,という理由で新渡戸を取り上げる。

新渡戸稲造は,札幌農学校卒業後,アメリカ,ジョーンズホプキンス大学に留学し,婦人もアメリカ人であった。その後も国際連盟事務次長として活躍する,当時の教育界きっての国際派であった。新渡戸の活躍は多岐にわたるが,本稿の主題である,旧制高校段階における教育に絞って述べると,明治 39 年から大正 2 年まで第一高等学校の校長を経験している。

秦(2003)によれば,新渡戸の校長就任は,一高に国際感覚を吹き込もうとした牧野伸顕文相の意向であったという。この時に,新渡戸は,「ソシアリティ」(社交性)を説き,ある意味で「雄健」重視の一高伝統の思想とは別路線を進めたのであった。ところが,寮記念祭の茶話会において,生徒の末広厳太郎<sup>3</sup>が,新渡戸のこの国際派としての社交性推奨を,「女尊男卑」だとして,強く批難した。これに対して,新渡戸は,静かな口調で,「今夜は近頃になく愉快地に覚えた」とやんわりと受けたことが伝えられている。生徒は,新渡戸の方針の肯定派と反対派,即ち,末広に同調する派とに二分され,論争が続いたという。

新渡戸や,その無二の親友である佐藤昌介のように,アメリカ・クラーク博士直伝の教育を受けた国際派であれば,当時の通念からすれば,「女尊男卑」と言われるほどの女性を尊重する姿勢を持っていた。その思想信条からすれば,「雄健」なる目標を掲げないことは当然であった<sup>4</sup>。「我ら多望の春にして」についても,鈴木栄太郎自身も,アメリカ研究に没頭していた時代であり,敢えて「雄健」を感じさせる語句を歌詞に盛り込む志向は弱かったであろう。また,設立に強い影響力があった北海道帝国大学の校風を勘案したとすれば,なおさら「雄健」なる語句は控えたであろう。

## 6. 結論

「我ら多望の春にして」は,当時としての歌い難さ故に,長調が好まれる現代では逆に歌い易いこととなり,愛唱歌として残ることになった。類似の例として,札幌農学校の「都ぞ弥生」が挙げられる。これも,作成当時,西洋音楽の系譜の長調で,歌い難いと言われたが,そのことが逆に,古めかしい短調ではないが故に,今なお愛唱されていることにつながって

いる。「我ら多望の春にして」の位置づけも、類似する。そして、当時の校歌の歌い難さを補った凜真寮歌の存在が重要である。歌い難い曲、馴染みにくい歌詞の校歌と、歌い易い大衆的な曲と、庶民的で平易な内容の歌詞」の寮歌の二重構造と補完関係が、特徴的であった。

【注】

- 1) このことは、中村(2008)も指摘している。
- 2) 大正末から昭和初期は、日本は観光ブームで、志賀重昂により「日本ライン」と命名された木曽川は、日本八景の一つに選ばれた。この「ライン」は、周知のようにドイツのライン川を彷彿させる意味であるが、当時は、溪流もさることながら、古城が川沿いに聳え景観を形成していることが重視されていた。この意味では、一番に白帝城(犬山城)を入れたことは、当時としては流行に乗った感があった。
- 3) 末広巖太郎は、後に、東大法学部教授、法学部長も歴任した、ドイツ民法の権威であった。その一方で、末広は、一高生の当時から、水泳部であり、一高・東大の運動部を代表する硬派として知られ、後に日本水泳連盟会長、日本体育協会理事長も務めた。
- 4) 新渡戸稲造の経歴と思想、本学とのかかわり、さらに佐藤昌介との関係については、中村(2008)が詳しい。

【引用文献】

- 宇都宮新, (1996), 「寮歌の歴史」, 旧制高等学校資料保存会, (1996), 『日本寮歌大全』, 旧制高等学校資料保存会編纂, pp.77-95.
- 旧制高等学校資料保存会, (1996), 『旧制高等学校寮歌集』, 旧制高等学校資料保存会編著.
- 作道好男・作道克彦編, (1983), 『岐阜大学農学部六十年史』, 教育文化出版.
- 下道郁子, (2009), 「大正時代の第一高等学校の寮歌の研究：旧制高校の教育と音楽的側面からの検討」, 『研究紀要』東京音楽大学, 33, pp. 23-41.
- 下道郁子, (2009), 「明治 20 年代～40 年代の旧制高等学校の音楽教育－特に第一高等学校の音楽活動を中心に－」, 『音楽教育史研究』, 11 号, pp.39-51.
- 下道郁子, (2012), 「幸運な寮歌「都ぞ弥生」」, 大学教育学会第 34 回 大会発表要旨集, 付録 2, pp.130-131.
- 高橋佐門, (1978), 『旧制高等学校研究：校風・寮歌論編』, 昭和出版, pp.8-9, 33-34.
- 中村征夫, (2008), 「特別寄稿 「凜呼真摯」, 「自化自育」の源流を求めて」, 記念誌編集委員会, 『創立 85 周年記念誌：岐阜高等農林学校から岐阜大学応用生物科学部に至る 85 年のあゆみ』, 岐阜大学農学部創立 85 周年記念事業会, pp.237-245.
- 秦郁彦, (2003), 「旧制高校物語」, 文芸春秋, pp.26-31, 179-184.
- 松元崇, (2009), 『大恐慌を駆け抜けた男：高橋是清』, 中央公論新社, pp.176-177.
- 若井勲夫, (2007), 「旧制高校寮歌の言葉と表現」, 『京都産業大学論集』, 37 巻, pp.188-158.

## **Study on the "Warera Tabou no Haru nishite (With our boundless and cherished ambitions in spring)": part 2; Historical backgrounds**

Katsumi Arahata<sup>1</sup>, Ikuko Shitamichi<sup>2</sup>, Daisuke Hirouchi<sup>3</sup>, Yo Nishio<sup>4</sup>,  
and Michio Sugiyama<sup>5</sup>

<sup>1)</sup> Faculty of Applied Biological Sciences, Gifu University

<sup>2)</sup> Faculty of Music Education, Tokyo College of Music

<sup>3)</sup> Organization for Promotion of Higher Education and Student Support,  
Gifu University

<sup>4)</sup> Faculty of Education, Gifu University

<sup>5)</sup> Professor emeritus, Gifu University

### **Abstract**

With regard to The Alma Mater of the *Gifu Koutou Nohrin Gakkou* (the Gifu Technical College for Agriculture and Forestry, "Warera Tabou no Haru nishite" (With our boundless and cherished ambitions in spring), the authors have conducted surveys in depth and clarified the composer's and lyrics writer's careers and personalities in the previous paper, however, the historical backgrounds of those days, the song's impacts on students' lives and their implications have not been studied yet. The objectives of this paper are to investigate these backgrounds and to examine impacts of it on students' lives on those days. As a methodology to this subject, a comparative approach between the Alma Mater and another students' song, "Rinshin-Ryouka" was adopted.

The results of the study revealed two aspects as follows:

First, historical backgrounds of those days when the song was published were the time between two World Wars and the midst of the era of "Taisho-Democracy." It was a period when freedom and liberty had been affluent in the society, specifically when the demilitarization was proceeding not only in Japan, but also worldwide.

Secondly, Students of the days had sung Rinshin-Ryouka as well as the Alma Mater as a combination of two songs. This dual Alma Maters' structure suggests that the official Alma Mater may politely be shunned by students while they had been fond of Rinshin-Ryouka. Ironically, at present, since people's taste on music has changed conversely, the first Alma Mater, the major key, has become popular among students.

Key Words: Rinshin-Ryouka, Miyakozoyayoi, dual Alma Maters' structure